

TAKI no TAWAGOTO

By 濱 博一

本欄担当は、書くと約束してくれましたが…締め切りは過ぎ時は流れてゆき…。今月も代筆で失礼致します。

今月号に寄稿を頂いた東鳴子温泉の大沼さんのお宿にお邪魔した時のことです。

ご自慢の露天風呂「母里の湯(もりのゆ)」の近くにある会議専門の離れにもご案内いただきました。そこは、雑木林に囲まれたとても静かな里山にありました。おもむろに大沼さんが「これは名セッションのアルバムなんです」とCDを掛けると…まるでそこにジャズバンドが居て演奏しているかのよう。ドラム・ピアノなど楽器の位置が手の取るようにはっきりと判ります。しかし、肝心のスピーカが見当たりません。喫茶店などによくあるBOSEのスピーカかと天井を見渡しますが、無い。CDプレーヤの傍に丁度和楽器の鼓(つづみ)のようなものがあるだけです。「これがスピーカなんです。」…

模型・ステレオと工作少年だった僕もまさか…左右のスピーカを背中合わせに配置した円筒形のスピーカなど想像したこともありませんでした。あまりに音の素晴らしさに聞き惚れてしまいました。超高級ホテルのリッツカールトン東京の全上級スイートルームにもあるとか。これが国内メーカーの完全なオリジナル。

最近百貨店にも並んでいるようなので、下記のメーカーホームページから視聴できる近所のお店を探して是非一度お聞きになってみてください。きっと驚くこと請合いですっ！



EMZシステム
<http://www.mssystem.co.jp/>

先月発生した岩手・宮城内陸地震の被災者の皆様に心より、お見舞い申し上げます。

さて、この震災は専門家の緊急調査で、**これまでに無いほど被災地区が狭い範囲に限定されている**ことが明らかになりました。**東北の殆どの地域・観光地は全く無事**です。

にも拘らず連日の報道により、広域災害と誤解され、旅行のキャンセル・予約が入らない状況が既に東北全域に及んでいるようです。**被災周辺地域への風評被害は、経済復興の最大の障害**であり、被災地をフォローする周辺地域に対して余りにも冷酷です。どうか冷静な情報収集と判断をお願いいたします。(濱)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2008/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

景 月



白鷹山頂(山形県)より朝日連邦を望む
by hama

**がんばれ！東北
負けるな岩手・宮城！**

岩手・宮城内陸地震
風評被害対策勝手連プロジェクトに賛
同します！！

寄稿 『東鳴子温泉の現代湯治への取組』

「快浴洗心の宿」旅館大沼 湯守 大沼伸治

宮城県北西部、鳴子温泉郷の一つ「東鳴子温泉」は湯歴六百五十年を数える老舗の湯治場です。伊達藩政期には藩の御用湯である御殿湯も置かれ、大いに賑わってきました。日本の高度成長が終わりを告げ、農業や漁業など第一次産業が衰退するにつれ、湯治及び湯治場も衰退の一途をたどっており、さらには昨今の衰退ぶりにおいては、いよいよ幕を閉じてしまうのではないかとの危機感さえ感じる今日この頃です。

そうした状況下で東鳴子温泉が地域づくりを始めたのは、平成十四年の春でした。たった一年で挫折を経験し、その後方向転換をしながらもその取り組みは足かけ六年を数えます。私たちの地域づくりの中核コンセプトを一言でいうと「垣根はすし」です。地域社会には多くの垣根が存在します。垣根がすべて弊害となるわけではありませんが、地域が過疎・高齢化を迎え、主幹産業である湯治が衰退する一方の状況下では、なんらかのドラッグは、リスクな変革が必要です。今、最大のリスクは、リスクをとらないことこそ最大のリスク

濱のいびやき 『い縁の深遠』

ビジネスマンは、初めてお会いするとき、名刺を交換する。以前からかなりの名刺交換をさせて頂く方だったが、最近益々名刺が手元から飛びかかってくる。

毎日十人の方と名刺交換をさせて頂くこととする。さて、日本人全員と名刺交換(出逢い)の何年かかるだろうか？

一年三百六十五日だから、三千六百五十人。丸めて年間約四千人とすると、人口は約一億二千万人だから…。

答えは三万年。計算間違いではない。一日百人で三千年。千人で三百年。来る日も来る日も常に新しい三千人の方々と出逢いを休み無く続け、漸く人の寿命とも言える百年を経て、日本人全員との「出逢い」が叶う。日に三千人とはないうつことか。出逢いに十時間割いたとして一時間に三百人。一分間に五人。一人当たりなんと十二秒しか出逢えない。これを百年間休まず営々と続けねばならない。これは可能なことであろうか？

長々と単純計算をご紹介させていただいたのは、訳がある。この計算から判ること。それは、同じ日本人同士であっても「一生の間に出逢えない人が殆どである」ということ。逆に言えば、「出逢った人たちは奇跡的な確率で、出逢っている」といえるのである。

これをたった一言で「縁」という。この一言に込められた深遠な意味と価値性。しつこく凄じ言葉だと思つ。

幾度か、「ありがたう」に因つていびやきして来た。「ありがたう」は、「有難い」と書く。これを当て字と思いつ

クであるとも聞きます。今こそ地域に生きる住民たち、また商売に携わる人々が心をオープンにし垣根を取り払い、未来に向け新しいスクラムをしっかりと組む必要があります。

東鳴子温泉は「現代の湯治場」を目指しています。伝統的な湯治をベースに「田んぼ湯治」をはじめとする農林業体験、湯治場を舞台としたアートイベント等、積極的に取り組んでおります。詳しくは、「なるこファンルーム」というホームページを是非ご覧ください。

最後に、このたびの岩手・宮城内陸地震で被災した皆様に心よりお見舞い申し上げます。また各方面よりたくさんのお励ましを頂戴し心より御礼申し上げます。昨年大地震を経験された北陸の先輩方からも正確な情報開示の必要性等、的確かつ有益なアドバイスをいただきました。濱さんからの「できる事から始めましょう」とのお言葉を胸に今後一歩一歩進んで参りたいと思います。



【プロフィール】
おおぬま しんじ
一九八六年立教大学社会学部観光学科を卒業。株式会社大沼旅館・五代目湯守。NPO法人東鳴子ゆめ会議・理事長。一体型の地域づくりに取り組む。湯治専門 <http://www.ohnuma.jp/>

んできました。が、このような出逢いの奇跡性を自覚した後では、シンの意味が明らかになってくる。

「有難い」とは、「有る事が難しい」希少な確率」つまり、奇跡のことである。忙しい世の中。出逢って共感することは、奇跡的に珍しいこと。だから感謝になる。世知辛い世の中。何かをして頂く事は、奇跡的に珍しいこと。だから感謝になる。

出逢いや、して貰う事が「有難い」事象ならば、我々の身の回りに起こる事は、殆どが奇跡的なことかも知れない。ところが、それに慣れてしまつて、当たり前になってくる。当たり前「普通のこと」には感謝ができない。心が動く感動も起きない。

当たり前前の水準が上昇すると弊害は連鎖する。ほんとうは奇跡的な確率で起こっていることも、当たり前前に思えてくる。その当たり前前のご起きなかつたとき、怒りや咎めの感情が起こる。不幸の始まりである。鈍感を勧める向きがある。それは、危機感・不安感への防衛にはなつても、果たして幸福への扉となるのであつたか。

日本は感謝の国だと、ある方から聞いた。心・芯から感謝の念が沸くときの幸福感は、味わってみなければ、理解しがたいかも知れぬ。幸福を願わぬ人は居まい。それが感謝から得られると深く知っている人は、今日また稀であろう。

かく言つて自身、あまたの方々の縁により、今日の幸福がある。

「縁ある皆様、心より有難いございます。」

鹿角市は、秋田県北東部に位置する人口約3万6,000人（2008年5月末現在、住民基本台帳）の都市である。藩政時代には南部盛岡領に属し、津軽領、秋田領との藩境に位置し、中心となる花輪は鹿角街道の宿場町、城下町、尾去沢鉱山の物資供給地として栄えた。現在の鹿角市も、住民の生活行動圏からすると盛岡市や弘前市とのつながりが強く、花輪の人によると、「岩手県庁、青森県庁に1時間、秋田県庁に4時間」とのことで距離感や意識が伝わってくる。ちなみに、JR花輪線の鹿角花輪駅は1923年に秋田鉄道「陸中花輪」駅として開業し1995年に現駅名となった。

この鹿角市の人口は地方小都市と同様に断続的に減少してきており、2005年の国勢調査において、DID（人口集中地区）が消滅した。すなわち、鹿角市の中心市街地である花輪地区が抜けたことである。商業統計の商業集積単位では、花輪本町商店街、花輪駅前商店街とも商店数、売場面積等の数字も落ちている。このように中心市街地の現状は厳しいが、商業近代化計画等に取り組んだことによる商店街や街路等の整備も進められ、抽象的な表現であるが、中心市街地として「まち」という形が残っている。

それでは、市外からの観光客の「まち歩き」という視点で花輪の市街地を考えたい。鹿角花輪駅に列車あるいは高速バスで降り立ったとしよう。まず、地方小都市というサイズもあるが、花輪の中心市街地は十分に徒歩や自転車で回れること、城下町の歴史遺産が数多く残っていること、商店街としての機能があること（業種が一通り揃っている、空き店舗率が少ない）、飲食店等が適度にあることである。

中心商店街の一角にある旧関善酒店は1856年に創業された旧酒造店で、日本最大級の吹き抜け木造架構があり国登録有形文化財となっている。1階は喫茶、工芸品販売があり、奥蔵のステージではコンサートも利用可能となっている。またこの建物は、NPO関善賑わい屋敷が運営しており、館内はNPOスタッフが案内しており、花輪の方の市民力を感じさせる。また、この関善の向かい方には、花輪朝市が3と8のつく日に行われており、約50の店が立つ。先に商業近代化計画により街路整備が進んだと述べたが逆に「こみせ」をほとんど失うことにもなったが、この関善の周辺に残っている。

また、商店街内には、そば、せんべい、造り酒屋、郷土料理、喫茶店などがほどよく点在し、小洒落ている店もある。商店街の随所に足を止められる、一服できるところがある、それも小洒落ていることも見逃せない条件である。

秋田県における多くの都市で中心市街地がほぼ壊滅的ともいえるほど機能が失われているなか、鹿角市花輪はまちの魅力が残り、「まち歩き」観光として今後の可能性があるといえる場所である。

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

相続について⑩

後から相続人が現れたケース

今回のケースは、被相続人が亡くなって遺産分割協議が相続人の間で終わってしまっただけからのケースです。

Case Study

中嶋さん(仮名)の父親は、投資などで多くの資産を形成しましたが、脳疾患により、相続のことを話し合う前に急死してしまいました。

相続人は、中嶋さんの母親と中嶋さん、そして2人の妹がいましたので、4人で遺産分割協議を開始して、各々の相続分を取り決めました。

そんな時、中嶋さんのもとにある人物から1通の手紙が届きました。それには中嶋さんの父に認知してもらった子どもである旨が書かれており、驚いた中嶋さんたちが古い戸籍を調べたところ、確かに亡くなった父親が認知した子でした。

弁護士に相談したところ、実子であるということになるため、財産相続権があるということでした。

Anser

中嶋さんたちが認知された子の存在を知らなかったとしても、相続人全員が参加していない遺産分割協議は無効ということになります。

したがって、この場合の遺産分割協議をその人物を交えてやり直さなくてはなりません。

なお、似たようなケースでは、分割協議の時点では認知されていなかった子が、その後、本人の請求によって認知が認められるという場合があります。

このようなときは、協議のやり直しはせずに、相続分に応じた価額の支払いをすればいいことになっています。

また、遺産分けが終わってしまった後に、他に大きな財産があることがわかった場合はどうなるのか？もしくはこっちの財産がほしい、というケースもごく稀にありますが、いちど有効に成立した遺産分割協議は、原則やり直しはできません。その場合は、その財産について別に協議をすることになります。

ただし、後から見つかった財産が重要なものであるときは、当初の遺産分割協議に重大な瑕疵があったとし、無効を主張できるケースもあります。

財産の内容では、県外にあったマンションや温泉の権利のついた土地などのご相談がありました。

(前号からの続き)

無量塔では、時と言う価値をつけた骨太の骨格に、ディテールにライトや堀口捨巳、吉田五十八のデザインを入れ建築を成立させている。これにカッシーナや李朝家具、バカラのアンティークやルオーの絵画といった新旧和洋の家具や軸、絵画、彫刻、焼き物が建物と調和するように配され、落ち着いた心地よい空間を描き出している。

無量塔のそばには、私が由布院にいた頃あった由布院空想の森美術館が、今では同じく藤林さんがプロデュースする「アルテジオ(artegio)」に建て代わっている。氏曰く「美術館の夢想園の露天風呂版」を目指した。この建物はミュージアム・レストラン・ショップからなるコンクリート打ちっ放しの複合施設である。

これが露天風呂を目指す？入館料600円は由布院NO.1の人気を誇る旅館夢想園の露天風呂700円に相当するものであり、由布岳が臨める大露天風呂での心地良さに匹敵する知的心地よさの場を提供しようというのが、ここのコンセプトだ。

マティス、クレー、ジョン・ケージ、マン・レイなど美術に音楽、静かなバー(BARMEZZO)や絵・音楽の関連図書を揃えた読書室もある。企画展や月一度は必ず開かれる由布院に移り住んでこられた小林道夫氏のチェンバロコンサート。絵を見て音楽を聴きながらワイン片手に本を読む、こんなことができる場所はそうそう無い。由布院の素材を使ったイタリアンダイニングに、そこで使われているお茶やドレッシング、音楽をモチーフにした小物やバックなどを購入することができるショップもある。今は亡き福岡県椎田町の田原町長が10年ほど前に「由布院は大字東京ムラだ」と私に言われたことを思い出す。

有楽町にある大分県のアンテナショップ「坐来」も洋食レストラン「方寸」も藤林さんが手がけている。大分自動車道の別府サービスエリアも。亀の井別荘の中谷健太郎さんに惹かれて藤林さんが日田から来て25年、由布院センスが連鎖反応を起こし輝きを増しているのを感じる。でも最後に健太郎さんの独り言「あんまり、地球に負担を掛けちゃいけない」。

